

長期モニタリング計画の改訂方針（案）

○科学委員会と各 WG 等の役割分担に課題

- ・どの WG 等でも担当しづらい項目を科学委員会に、という整理は見直す必要。
- ・多数の WG 等にまたがるテーマを包括的に見るべきものが科学委員会マター。
- ・各 WG 等が原案を作成、科学委員会で全体チェックという分担ではないか。

○総合レビューを残すべき

- ・長期モニタリングの結果は数ページの総合レビューとして残してはどうか。
- ・膨大な資料ではなく一般向けにわかりやすいものにすべき。

<前回科学委員会での主な意見>

→以上を踏まえ、科学委員会と WG 等の役割等を整理し、計画本体で明確化する。

1. モニタリング項目の評価

- ・個別のモニタリング項目は、全て各 WG 等が評価する。
- ・単独の WG 等での評価が困難な場合は、関連 WG 等との連携や外部会議等の活用により評価する。
- ・科学委員会は、個別のモニタリング項目の評価は担当せず、各 WG 等による評価を総合的に確認する（この際、可能な限り資料の簡素化を図る）。

※これまで科学委員会が評価担当とされていた個別モニタリング項目の取扱いは、以下のように整理。

No.20（ヒグマ出没状況等）	→エゾシカ・ヒグマ WG 担当。
No.21（気象観測）	→評価基準のない基礎情報であるため、事務局が科学委員会に定期報告。
No.22（海ワシ類越冬個体数）	→海域 WG（担当委員）担当。
No.23（シマフクロウつがい数等）	→保護増殖事業検討会を評価担当と位置づけ、事務局が科学委員会に定期報告。
No.24（事業実施状況の把握）	→評価基準のない基礎情報であるため、事務局が科学委員会に定期報告。
No.25（社会環境の把握）	
No.⑧（オジロワシ繁殖状況等）	→海域 WG（担当委員）担当。

2. 評価項目の評価

- ・各 WG 等は、適宜連携し、各モニタリング項目の評価を総括して、評価項目の評価案を作成する。
- ・科学委員会は、各 WG 等が作成した評価案を確認し、評価を決定する。
- ・評価結果は、世界遺産管理計画の改訂等に活用する。
- ・評価項目の評価は、広く一般に発信できるよう平易かつ簡潔なものとする。
- ・計画期間内の評価完了を目指し、次年度は評価手順等を検討。

（評価案の作成を主担当する WG 等の分担イメージ）

I・IV：海域 WG

VI：エゾシカ・ヒグマ WG

V：河川 AP

VII：適正利用・エコツアーWG

※II、III、VIIIについては要検討（できる限り関連 WG 等の連携により評価案を作成することを想定）。

イメージ

長期モニタリング計画 評価項目の評価シート（イメージ）

評価項目	I 特異な生態系の生産性が維持されていること。	
評価項目選定理由	世界自然遺産として登録された基準(クライテリア(ix)生態系)である。	
評価案の作成主体	海域ワーキンググループ	
評価年月	2019年●月	
対応するモニタリング項目とその評価	1 衛星リモートセンシングによる水温・クロロフィル a の観測 <情報不足> 2 海洋観測ブイによる水温の定点観測 3 アザラシの生息状況の調査 <O> 4 海域の生物相、及び、生息状況(浅海域定期調査) <△> 5 浅海域における貝類定量調査 <O>	
※評価は評価基準が設定されている項目のみ	①航空機、人工衛星等による海水分布状況観測 ②アイスアルジーの生物学的調査 ③「北海道水産現勢」からの漁獲量変動の把握 ④スケウダラの資源状態の把握と評価(TAC設定に係る調査) <O> ⑤スケウダラ産卵量調査 ⑥トドの日本沿岸への来遊頭数の調査、人為的死亡個体の性別、特性	
評価	<input type="checkbox"/> 維持されている	<input type="checkbox"/> 維持されていない
	<評価の理由> <i>(各モニタリング項目の評価コメントや、評価基準のない基礎情報のモニタリング結果から言えること等、本評価に至った理由を簡潔に記載。)</i>	
今後の遺産地域の管理の方向性に関する意見	<i>(調査手法等へのコメントではなく、評価結果を踏まえた遺産地域の管理の方向性等についての助言等があれば、適宜記載。)</i>	

※対応するモニタリング項目の評価凡例（結果を視覚的にわかりやすく表現）

- ・「O」：「適合+改善」又は「適合+現状維持」
- ・「△」：「適合+悪化」又は「非適合+改善」
- ・「×」：「非適合+現状維持」又は「非適合+悪化」
- ・「情報不足」：評価時点において上記のいずれの判断も困難なもの